

# 簡牘・帛書の発見と『史記』研究

藤田勝久

はじめに

- 一 一九七〇年代までの『史記』注釈
- 二 黄老思想と儒家、天官の資料
- 三 『史記』の資料と編集  
おわりに

はじめに

二〇世紀には、簡牘・帛書の資料が大量に発見され、歴史学、思想などの研究に進展があった。歴史学では、二〇世紀前半に発見された敦煌・居延漢簡の研究があり、それ以後もフィールドの遺跡や古墓から出土した法律、公文書類の資料をあわせて考察が進んだ。<sup>1)</sup>

一方、七〇年代以降に古墓から発見された書籍は、主に文献学、思想史の側から研究が進んだ。こうした簡帛資料

の発見が古文獻研究に与えた意義について、裘錫圭「中国出土簡帛古籍在文献学上的重要意義」（一九九九年）は、<sup>②</sup> 三つの意義を述べている。

その一は、貴重な佚書が提供されたこと。二は、これまで伝わっていた古書の早い時期の書物が提供されたこと。その例として、『老子』『論語』『礼記』『孫子』などを挙げている。三は、古書の真偽や、その時代、源流について認識を得ることができたこと。ここでは兵書のほか、『鶡冠子』、帰藏、医学書、算数書などをあげている。

しかし私は、さらに四に、総合的な性格をもつ書物の編纂過程の解明に寄与することが加えられるとおもう。たとえば司馬遷が著した『史記』は、一つの古典であるとともに、雑家や百科全書の要素をもつ総合的な書物である。そのため出土資料が増加してくると、『史記』の編集について新たな知識をもたらすようになった。

ここでは、歴史学からみた古文獻研究の一つとして、簡牘・帛書の発見がどのように『史記』研究に貢献するかという<sup>③</sup>ことを述べてみたい。

## 一 一九七〇年代までの『史記』注釈

司馬遷が『史記』を著したとき、どのような書物を見たかということは、『史記』に引用された書名によって知ることができる。<sup>④</sup>

たとえば、瀧川龜太郎『史記会注考証』（以下『会注考証』と略す）では、巻末の「史記総論」に「史記資料」の項目を設けた。そこでは、『漢書』司馬遷伝の論贊にいう『世本』『戦国策』『楚漢春秋』のほか、以下の書名を略記している。

\* 詩、韓詩内外伝、書、古文尚書、書序、易、礼、周官（周礼）、春秋、春秋左氏伝、春秋公羊伝、春秋穀梁伝、  
国語、鐸氏微、虞氏春秋、呂氏春秋、春秋雜説、董仲舒春秋災異記、論語、孝経、中庸、弟子籍、五帝徳、  
帝繫姓、夏小正、王制、諫記、五帝繫讎、尚書集世、春秋曆譜讎、五徳曆譜、禹本紀、山海経

\* 蒯通長短説、合甲、功令、列侯功籍

\* 太公兵法、司馬法、管子、晏子春秋、孫子、呉子、魏公子兵法、老子、老萊子、墨子、李悝李克書、商君書、  
申子、莊子、孟子、鄒衍子、鄒奭子、淳于子、慎子、田駢子、接子、環淵子、劇子、尸子、長廬子、吁子、  
公孫固子、荀子、韓子、新語

\* 離騷、宋玉・唐勒・景差賦、賈誼賦及論著、司馬相如賦

これは、おおむね六経（経書）、公文書、諸子、文学の賦にいたる配列であり、司馬遷が引用した書物の概略をうかがうことができる。

『史記』中の書名は、さらに金徳建『司馬遷所見書考』（一九六三年）で詳しく考証され、その後も張大可「論史記取材」（『史記研究』一九八五年）は、金氏の考証を継承して、以下の二〇二種に整理した。

1. 六経及び訓解書（二三種）
2. 諸子百家及び方技書（五二種）
3. 歴史地理及び漢室档案（二〇種）

#### 4. 文学書（七種）

また原富男『補史記芸文志』（一九八〇年）は、司馬遷より以前の各年代ごとに書物の成立を整理し、現存する文献との比較を進めた。しかしこれらの考察は、書名の考証が中心であり、それが『史記』の中にどう組み込まれているかという問題意識は、まだ十分ではない。

これに対して、『史記』の素材を別の点から指摘した成果がある。それは歴代の『史記』注釈にみえている。

『史記』の注釈では、南朝宋・裴駰の「集解」、唐・司馬貞の「索隱」、唐・張守節の「正義」が三家注として知られ、宋代以降の版本に合注されたが、そこに諸本と対照した字句や意味の考証がある。たとえば『史記』晋世家を例にとれば、三家注は司馬遷の時代前後に成立した以下の書籍と照合している。

〔集解〕 左伝、世本、礼記、穀梁伝、公羊伝、韓詩外伝

〔索隱〕 世本、春秋、左伝、国語、尚書

〔正義〕 世本、国語、左伝

また『史記』趙世家では、以下のような書籍と対照している。

〔集解〕 春秋、左伝、新序、韓詩外伝、戦国策、穀梁伝、淮南子

〔索隱〕 穆天子伝、世本、左伝

〔正義〕 山海経、穆天子伝、左伝、世本、司馬法

これらは本来、本文の説明や、年代、人名などを考証したものであるが、文章の類似という点からみれば、司馬遷の利用した材料との關係を示唆する。こうした諸書と対照する注釈は、それ以降もつづけられ、とくに梁玉繩『史記志疑』（清乾隆、一七八七年）や、『会注考証』では、一歩進んで年代を訂正し、出典を示唆するという観点が強くなっている。いま『史記』趙世家をみておこう。

梁玉繩は、後世の資料とともに先行する文献を指摘するが、晋出公十一年の知伯の事件では「左伝末篇無其事。史公或別有拠。故說苑亦載之也」とあり、『左伝』と異なる『說苑』などの素材を推測している。

〔志疑〕 山海経、大戴礼、穆天子伝、淮南子、国語、左伝、世本、說苑、新序、戦国策、

呂氏春秋、荀子、韓詩外伝

瀧川『会注考証』は、冒頭に「愚按、此篇左伝・国策所不載甚多。史公別有所拠。論贊云、吾聞馮王孫曰、趙王遷其母倡也云云。豈他事亦有得之於馮者乎」といい、『左伝』『戦国策』と別の来源として馮氏からの伝聞を指摘している。これは顧頡剛「司馬談作史」（一九五一、『史林雜識』一九六三年）と同じ説明である。しかし、いずれも伝承のほかに、趙世家の骨格となる「趙紀年」の存在や性質にはふれていない。また瀧川氏は『左伝』『戦国策』をふくむ詳細な注釈を加え、晋文公となる重耳の説話は「重耳以下、本僖（公）二十三年左伝」「本僖二十四年左伝」「本僖二十八年、昭（公）十三年左伝」という説明をする。他の対照する書物は以下の通りである。

〔会注考証〕 大戴礼、穆天子伝、国語、左伝、説苑、新序、荀子、韓詩外伝

呂氏春秋、戦国策、韓非子、淮南子、孟子、商君書

これらは歴代注釈を進めて、司馬遷が依拠した出典を示唆する考証である。しかし梁玉繩、瀧川氏らの注釈では、まだ『史記』各篇の全体的な構成を分析するにはいたっていない。また典拠となる書物は、その成立した時期の形態や、司馬遷が見た書物と同じ写本か異本かという問題があり、後世に編纂された『戦国策』『説苑』『新序』との関係も問題となる。

こうした文献研究に対して、出土資料を利用した発想の異なる考証が現れた。その最初は王国維の研究である。<sup>①</sup>

王国維「殷卜辞中所見先公先王考」(一九一七年)、「殷卜辞中所見先公先王統考」(同年)は、甲骨文字の拓本と比較して、『史記』殷本紀にみえる王の系譜(王名)を考証したものである。王国維は、その後も地下の資料と地上の文献を比較する二重証明法を、『古史新証』(影印本一九三五、清華大学出版社、一九九四年)で述べている。

また王国維「太史公行年考」(一九一七、『觀堂集林』卷十一、一九二九年)は、索隱が引く『博物志』の司馬遷の経歴を、敦煌漢簡と比較して信頼性があることを考証した。かれは、最終的に『博物志』とは異なり、正義注による景帝中元五年(前一四五)に生まれたという説を提唱するが、この考証は敦煌漢簡の研究から派生したものと見えよう。郭沫若「《太史公行年考》有問題」(『歴史研究』一九五五年五期)は、この生年の考証を批判し、武帝建元六年(前一三五)とする説を支持した。しかし郭氏が、さらに敦煌漢簡一〇例を挙げて簿書の信頼性を論証したのは、簡牘資料による司馬遷研究の一部といえることができる。

このほか陳直『史記新証』（一九七九年）、『漢書新証』（一九五九年）<sup>①</sup>は、金文や出土資料によって新たな注釈を試みたものである。このとき『史記新証』の分量は少ないが、『漢書新証』が先に出版され、さらに一九七九年に補訂されたという経過から、前漢初期の考証は両書を合わせて参照する必要がある。『漢書新証』（初版、自序）では、つぎのように言う。

我之方法、以本文為經、以出土古物材料証明為緯。……其体例完全倣楊氏窺管……。有百分之七十、取証於古物、其余管見所及、一併附入。

我所引用之材料、主要在居延敦煌兩木簡。次則銅器、漆器、陶器、封泥、漢印、貨幣、石刻各部分。

つまり陳直氏は、楊樹達『漢書窺管』（中国科学出版社、一九五五年）の古物による注釈をさらに進め、約七割を古物によって考証した。その主要な資料として、居延・敦煌漢簡と、銅器、漆器、封泥、漢印、貨幣、石刻の各部分を使ったという。しかし、ここでは文字や名称の考証が多く、『史記』各篇の編集を論ずるにはいたっていない。これは出土資料の分量と内容に限界があったことにもよる。

一九八〇年代以降になると、『史記』に関連する簡牘・帛書の種類が大きく増加した。これらの出土書籍は、前漢末の漢王朝の図書目録である『漢書』芸文志と比べて分類され、六芸（經書）、諸子、兵書、數術、方技（医学など）にほぼ対応することがわかっている。<sup>②</sup> こうした諸資料の一部は、司馬遷が利用した材料と共通し、いわば著述の種本とかかわる資料である。また司馬遷が利用した同系統の資料ではなくとも、『史記』の先行資料のあり方を推測させる貴重な資料である。これを、つぎに①黄老思想、儒家、天官の資料と、②その他の記事資料、紀年資料などに分け

て説明してみよう。

## 二 黄老思想と儒家、天官の資料

『史記』太史公自序によれば、司馬談が仕官するとき、かれは唐都から天官の思想と、楊何から『易』、黄子から道論を学んだといい、とくに道家を高く評価する「六家の要旨」を残している。また談は、司馬遷に儒家の教育をほどこしたといわれ、著述を息子に委託するとき孔子の編纂した『春秋』を継ぐことを強調している。こうした経過から、司馬談・遷の父子にとって、道家、儒家、天官の思想は重要な影響を及ぼしたであろう。

ただし文献では、これまで漢代初期の黄老思想や、儒家、天官の資料のあり方が、よくわからなかった。近年の出土資料には、これらと関連する書籍をふくんでいる。

### 1 黄老思想と儒家の書物

まず儒家の資料では、戦国早期の信陽楚墓竹簡がもっとも早い。ここには、「周公」をふくむ文字があり、儒家に関する資料とみられているが、断片が多く、その性格は明確ではない。つぎに黄老思想と儒家の文献を共通してふくむのは、湖北省の郭店楚墓竹簡である。その年代は戦国中期といわれるが、ここに『礼記』緇衣篇と同じ文章や、儒家の資料、『老子』など道家の篇がある。「六徳」には、すでに「詩、書、礼、楽、易、春秋」を並べており、「語叢一」には『易』『詩』『春秋』の性質を述べた表現がある。もしこれが書籍として認識されていたのなら、この時期までに経書の原型が成立していたことになる。また「窮達以時」には、『説苑』『韓詩外伝』と類似する説話があり、



その中に「子胥、前に功多く、後に戮死せるは、其の智衰うるに非ず」とあり、すでに伍子胥の死が論評されている。これは『史記』伍子胥列伝の内容にかかわるとともに、後世の『説苑』『韓詩外伝』が先行資料を収録していたことを示唆するケースである。

漢代では、湖南省長沙市の馬王堆三号漢墓から出土した帛書に、文帝期までに書写された『周易』『老子』など儒家・道家の資料がある。<sup>⑫</sup>とくに馬王堆帛書「老子乙本卷前古佚書」は、「六家の要旨」にかかわるといわれ、その内容にも注目すべきものがある。それは天道を重視する思想や、存亡・興壊に関する観点であり、『経法』論約篇には以下のように言う。こうした興亡の原理を探る視点は、『太史公書』の構想と共通するものである。

・故執道者之觀於天下也、必審觀事之所始起、審其刑（形）名。刑（形）名已定、逆順有位、死生有分、存亡・興壊有処。然后參之於天地之恒道、乃定禍福・死生・存亡・興壊之所在。

・故に道を執る者の天下を観るや、必ず審らかに事の始めて起こる所を観て、其の形名を審らかにす。形名已に定まれば、逆順位有り、死生分有り、存亡・興壊処有り。然る后、之を天地の恒道に參すれば、乃ち禍福・死生・存亡・興壊の在る所を定む。

安徽省の阜陽双古堆漢簡には、文帝期までの『周易』の断簡三〇〇余枚と『詩経』の断簡一七〇枚がある。『史記』では『詩』『書』『易』などを引用し、春秋時代以前の歴史叙述や、格言のような役割に生かしており、こうした資料はその一部が出土したといえよう。また阜陽漢簡には、『呂氏春秋』と『説苑』『新序』の一部がみられるといい、ここでは前漢末に劉向が編纂したという『説苑』『新序』の一部は、戦国・秦漢時代の説話を収録していたことになる。

う。これらは、『史記』の素材となった資料の一部である。

そこで注目されるのは、河北省の定県八角廊漢墓で出土した竹簡である。この漢墓は、前漢末の中山王の墓といわれ、司馬遷の時代より後の資料である。しかし、そこには『論語』のほか、後世の『孔子家語』と類似する「儒家者言」の資料がある。『史記』仲尼弟子列伝の論贊によると、司馬遷は弟子の姓名を「弟子籍」「論語」から採ったというが、今日に伝わる『論語』とは相違がある。かえって『孔子家語』に、仲尼弟子列伝とよく似た記述がある。そこで、これまで『孔子家語』は後世の偽書という説もあったが、定県漢墓の資料と比べてみると、『孔子家語』の一部は前漢末までに存在したことになる。だから『史記』仲尼弟子列伝では、それ以前に書写された『孔子家語』と類似する資料を利用した可能性が出てきた。この意味で、司馬遷より少し後の漢墓から出土する資料にも注意する必要がある。

このように戦国・秦漢時代の墓から出土した資料には、司馬談・遷が学んだ学問と共通する書籍をふくんでおり、『史記』との関連をも示している。

## 2 天文・占いの資料

天文に関する資料は、湖北省随県の曾侯乙墓から出土した漆絵箱に、戦国初期までの「二十八宿」名がみえ、また雲夢睡虎地秦墓の竹簡に『日書』と呼ばれる占いがある。工藤元男氏は、『日書』の原理を考察し、このほか定県漢簡『日書』や、阜陽漢簡『日書』、江陵九店楚墓竹簡『日書』、江陵張家山漢簡『日書』、天水放馬灘秦簡『日書』、江陵王家台秦簡『日書』の占いに注目している。『日書』には、二十八宿占いに関する記述があり、阜陽漢簡『日書』では祭祀、土木の吉凶を伝えている。

また近年、湖北省荊州市の周家台三〇号墓からも、秦代の曆譜のほか、二十八宿占いや五行占などの資料が出土した。<sup>(8)</sup>とくに秦始皇三十四年の曆譜は、一年のカレンダーであるとともに、そこに官僚・官吏の着任や出張などが書き込まれており、それは一種の紀年資料としての性格をもつことになる。

漢代では、馬王堆帛書に「五星占」「天文氣象雜占」という天文占いの資料がある。「五星占」の土星紀年には、秦始皇帝、漢（高祖）、孝恵帝、高皇后、（文帝）の紀年を記し、一部に「張楚」という陳渉の国号を残している。これは、星占の資料であるとともに、紀年資料としての価値をもっている。

こうした天文占いの資料は、必ずしも『史記』天官書にみえるような国家・王侯を占う内容ではなく、もう少し下の官吏など個人の吉凶を占うものが多い。しかし戦国、秦漢時代の『日書』や星占の発見は、司馬談の時代までに天文資料が竹簡・帛書に書写されたことを物語っている。だから司馬談は、唐都や楊何・黄子から、それぞれ天文・易・道論を学んだといっても、口述のほかに書写された書籍をも利用したのであろう。

このように二〇世紀の出土資料には、黄老思想や儒家、天官に関する資料がふくまれ、これらは司馬談・遷の父子が著述をするとき、思想的な影響を及ぼした書物と関連する。しかし黄老思想の資料は、歴史の変化を示す記述がありながら、『史記』の骨格となる記事が少なく、また儒家の資料も、とくに春秋時代より以降では『史記』の主要部分とはならない。天文資料も、一部は『史記』天官書の記述と関連するが、それ以外の諸篇には主要材料とはならない。そのため『史記』では、さらに多くの諸資料を利用する必要がある。その最も大量な素材は、故事・説話のエピソードと、紀年・系譜などの資料である。これを『史記』の構成とくらべながら整理してみよう。

### 三 『史記』の資料と編集

#### 1 諸子と説話資料

説話では、すでにみた『呂氏春秋』『説苑』『新序』と関連する資料がある。また諸子では、郭店楚簡『老子』や馬王堆帛書『老子』のほか、山東省銀雀山竹簡『孫子』『孫臏兵法』などの兵書が有名で、軍事思想の観点からも考察が進んでいる。<sup>(6)</sup> 同じように出土資料との比較からみれば、諸子の文献は、『史記』韓非列伝や屈原賈生列伝、司馬相如列伝のように、一部に引用されている篇がある。しかし、これらは『史記』の主要な素材ではない。

むしろ『史記』の素材という点からすれば、銀雀山竹簡『孫子』書後の説話のほうが重要である。ここには孫武が呉王闔廬の前で女官を閲兵する話が見えるが、これは『史記』孫子列伝と同じ内容で、しかもやや詳しい。したがって孫武の説話は、『史記』の素材と共通する資料といえよう。

こうした説話は、『史記』の中に多くみえ、『説苑』『新序』『戦国策』の一部とも共通する場合があった。したがって簡牘・帛書の発見は、漢代までの説話形式と内容を再検討させることになる。

#### 2 春秋資料と戦国故事

つぎに春秋時代の『国語』『春秋左氏伝』を推測させる資料がある。馬王堆帛書『春秋事語』には、晋、燕、韓、魏、魯、斉、衛、呉、宋、越などに関する一六章の記述がある。これは直接的に『春秋』『国語』や、『史記』の各篇と共通する記事ではないが、漢代までに種々の形態の春秋事語が伝えられたことを示している。<sup>(7)</sup>

また戦国故事では、馬王堆帛書『戦国縦横家書』がある。<sup>⑧</sup>この資料は、全部で二七篇の故事があり、そのうち約六割が新出資料で、残る約四割が『史記』『戦国策』と共通し、一部に『韓非子』と共通する故事一篇があった。これは戦国故事の形態と、『史記』の構成について重要な示唆を与える。

それは一に、前漢末に劉向が編纂した『戦国策』は、司馬遷より後世の資料であり、しかも宋代に散佚したものを再編集した版本が伝えられたことから、その信頼性が問題となっていた。しかし故事の一部は、前漢初期の資料を正しく伝えていたことを証明した。その語彙を『史記』と共通する篇で比べてみると、『戦国策』のほうが『戦国縦横家書』とよく似た構文で、『史記』のほうが編集を加え、文字の書き換えをした形跡がうかがえる。これは『戦国策』収録の故事が、オリジナルな構文を伝えており、『史記』から引用したという説明は困難であることを示している。

二に、司馬遷が『史記』に故事を利用した方法が、具体的にわかるようになったことである。その典型的な例は、『史記』穰侯列伝と韓世家である。ここでは、戦国紀年と系譜資料の間に『戦国縦横家書』と共通する故事を組み込むことによって、国家の興亡と、人物の運命を描き出している。<sup>⑨</sup>そして何よりも重要なことは、『史記』ではこうした形式の資料がかなりの分量を占めており、『戦国縦横家書』『戦国策』との比較によって、司馬遷が戦国故事を取捨選択した編集方法が考察できるようになったことである。

また派生する問題として三に、思想史の側からも『韓非子』の成立が検討できるようになったことである。<sup>⑩</sup>そして戦国、秦漢時代の出土資料とくらべれば、『韓非子』『呂氏春秋』『淮南子』なども、それぞれの思想と故事・説話を利用して編纂した書物であることがわかり、今後はこうした書籍の構成分析も進展するであろう。

しかし司馬遷の著述が、『呂氏春秋』『淮南子』などと決定的にちがうのは、さらに大量の紀年資料を利用して、諸資料を編年したことである。これは『史記』を歴史書とみなす大きな要因である。

## 3 紀年資料と系譜

この紀年にかかわる簡牘・帛書には、以下のようなものがある。<sup>②</sup>

まず戦国時代では、戦国楚簡に事件を基準とする「大事紀年」がみえ、包山楚簡では七カ年に及ぶ楚紀年がわかっている。ただしその内容は、「大司馬昭陽が晋の師を襄陵に敗る」事件をのぞいて『史記』趙世家に記述がなく、司馬遷は楚紀年を利用していないとおもわれる。

また戦国・秦代では、睡虎地秦簡『編年記』がある。ここでは竹簡五三枚の上下二段に、秦昭王元年から始皇帝三十年までの紀年と、戦役などの事件、墓主とおもわれる人物の経歴、家族の状況が記されている。このうち秦の事件は、一部が『史記』六国年表と一致しており、司馬遷が「秦記」を利用したという記述を裏づけることになる。しかし『編年記』と、『史記』趙世家の紀年とは相違する場合があり、ここに秦曆と趙曆の相違を示唆している。

阜陽漢簡「年表」は、断片であるが、一本の竹簡に各国系譜を併記して一覧する形式で、大きく二つに分類されるという。その区分は、あたかも『史記』十二諸侯年表と、六国年表の区分と関連しており、司馬遷の編集を考える資料となる。

秦漢時代では、曆譜と『日書』などが出土していたが、ここに事件が記されていれば、これも紀年にかかわる資料となる。その一つ、湖南省沅陵虎溪山漢墓の『日書』には、閻氏五生、閻氏五勝の篇名があり、注に楚漢戦争時の事件・人物を記すという例が紹介されている。<sup>③</sup>

陳勝反攻秦以十月壬申癸酉伐正当西方。

楚將軍項籍助趙。

同じように馬王堆帛書「五星占」も、紀年にかかわる資料とみなされる。そこで戦国、秦漢時代の紀年資料は、あらためて晋代に出土したという汲冢竹書の書籍や、『竹書紀年』の性格を考える手がかりを与えるものといえよう。それと共に、『史記』紀年資料の性格を具体的に考察できるようになったという意義をもっている。

#### 4 その他の資料

このほか興味深い資料として、医学関係の書物がある。たとえば馬王堆帛書の医学書には、婦人科の書、小児科の書があるといわれ、こうした医学書の出現は『史記』扁鵲列伝の伝えを連想させる。<sup>(28)</sup>

扁鵲名聞天下。過邯鄲、聞貴婦人、即爲帶下醫。過雒陽、聞周人愛老人、即爲耳目痺醫。來入咸陽、聞秦人愛小兒、即爲小兒醫。隨俗爲變。秦太醫令李醯自知伎不如扁鵲也、使人刺殺之。至今天下言脈者、由扁鵲也。

扁鵲は、その国の俗にしたがって専門を変えたという。かれは、趙の邯鄲で婦人を大切にすると聞くと、婦人科の医者となり、秦の咸陽に行き小児を愛すると聞くと、小児科の医者になった。こうした伝えは、どこまで事実かわからないが、漢代の医学に同様の内容があるのは、たしかに実状をふまえた伝説であったことがうかがえよう。

また『史記』では、漢代詔書、公文書と共通する出土資料は見られないが、『漢書』では敦煌漢簡や居延漢簡のように共通する記事がある。したがって今後は、公文書のような内容においても『史記』『漢書』を通じて検討できる

であろう。

## 5 『史記』の編集

このように出土資料の内容と、従来の古文獻をあわせ、『史記』の構成を考えてみると、司馬遷は王朝に集められた書籍を主要な素材として編纂したことがわかる。また説話やエピソードのような話も、すでに漢代までに多くは書写資料となっていたことがうかがえる。その形式は、紀年と記事資料を組み合わせて歴史を叙述する点で、いわば『春秋左氏伝』の形式に近いものであったといえよう。『史記』の構造と編集過程は、各篇ごとに論ずる必要があるが、ここではその展望を簡単に述べておこう。<sup>24)</sup>

まず『史記』五帝本紀、夏本紀、殷本紀、周本紀は、経書、伝説、系譜、紀年資料を中心に編集され、周本紀の後半には戦国故事の利用がみられる。秦本紀、秦始皇本紀は、紀年資料が多く、そこに碑文や記事資料が挿まれている。項羽本紀と高祖本紀は、『楚漢春秋』によるといわれるが、漢代の呂后本紀、孝文本紀には、詔書や公文書とおもわれる資料がある。

『史記』十表では、系譜、魯国の紀年資料、「秦記」と呼ばれる紀年、楚王と項羽の楚紀年などが想定され、そのほか漢代王侯の資料を使った可能性がある。『史記』八書は、制度の沿革を述べるとき経書と共通する資料を利用し、そのほか天文、暦法の資料や、卜筮祭禱資料も関連資料となろう。

『史記』世家では、その先祖の伝えに経書と共通する場合があります、そのほか説話、系譜、紀年資料、戦国故事、公文書などを利用した形跡がある。それをさらに少ない紀年と、説話や諸子、系譜、戦国故事、公文書などで構成したのが『史記』列伝ということになる。ただし『史記』列伝には、周辺諸民族の社会と歴史を記した外国列伝にあたる



篇や、日者列伝、貨殖列伝などの資料があり、その材料は複雑であると推測される。

## おわりに

中国で出土した簡牘・帛書をみると、これまで『史記』の先行資料といわれた書籍の一部が現れていることがわかる。それは今日に伝えられた古文獻の性格を再検討させ、また司馬遷の時代より後に編纂された『戦国策』『説苑』『新序』の一部も、前漢までの記述を伝えていたことを教えてくれる。この意味において、簡牘・帛書の発見は、漢代までの諸資料のあり方を解明する手がかりを与えるといえよう。

司馬遷は、こうした諸資料を利用して『史記』を編集したのである。しかしこのとき、司馬遷が先行資料を利用したといっても、それをモザイクのように引用したのではなく、自分の歴史観によって記事を取捨選択している点が重要である。かれは、経書、諸子、紀年資料、系譜、曆譜、占いの書、戦国故事、公文書などのほかに、信頼性の疑わしい説話や故事をふくめ、多くの諸資料を選択して『史記』を完成させたとおもわれる。したがって出土資料の分析は、さらに進んで『史記』の構造と編集過程を明らかにするという価値をもっている。

ただし、もう一つ注意されるのは、先行する書写資料のほかに、司馬遷が旅行による取材や、漢代の人々からの伝聞、語り物などを多く利用したという考えである。とくに二十歳の旅行は、一般に著述の取材が目的であったといわれる。しかし司馬遷の旅行先と、『史記』各篇の記述をくらべてみると、本文にはほとんど現地の記述がなく、わずかに各篇末尾の論贊に、一部の見聞が記されているにすぎない<sup>(26)</sup>。だから司馬遷の旅行体験は、のちに著述をする背景として、書物を編集するときの歴史評価や、歴史地理などに影響を及ぼしたとおもわれるが、旅行の取材を『史記』

の主要資料とみなすことはできない。ここから司馬遷が著述に利用した主要資料は、やはり当時の書写された諸資料が中心であり、あらためて簡牘・帛書の形式が注目されるのである。

簡牘・帛書の発見は、古文獻の成立と、歴史・思想の文獻研究を深化させるとともに、『史記』のような総合的書物の構造を明らかにする意義をもつことがわかるであろう。今後は、こうした出土資料と古文獻を分析しながら、『史記』各篇の構造に即して、司馬遷の歴史観を考察する必要がある。

## 注

- (1) 王国維「最近三三十年代中国新発見之学問」(一九二五年)は、古来の三大発見、すなわち①漢代の孔子宅の壁中から出た書物、②西晋時代の汲冢書、③殷墟の甲骨文字、敦煌・西域の漢晋木簡、敦煌千佛洞の写本書卷などの発見により、各時代に新しい学問が興ったことを指摘した。また近年では大庭脩『木簡学入門』(講談社、一九八四年)、同『大英博物館藏敦煌漢簡』概説(同朋舎出版、一九九〇年)、永田英正『居延漢簡の研究』序章(同朋舎出版、一九八九年)、駢宇騫・段書安編著『本世紀以来出土簡帛概述』(台北市、万卷楼圖書、一九九九年)などに紹介がある。
- (2) 裘錫圭「中国出土簡帛古籍在文献学上的重要意義」(『中国出土資料研究』三号、一九九九年、『北京大学古文獻研究所集刊1』北京燕山出版社、一九九九年)。
- (3) 拙著『史記戦国史料の研究』第一編第一章『史記』と中国出土書籍(東京大学出版会、一九九七年)では、戦国期を中心に出土資料と『史記』との関係を述べた。しかしその後も新出資料の発見が続いており、本稿はそれを補足するものである。

(4) 瀧川龜太郎『史記會注考証』『史記総論』史記資料(東方文化学院東京研究所、一九三二―三四年)、金徳建『司馬遷所見書考』(上海人民出版社、一九六三年)、張大可「論史記取材」(『史記研究』甘肅人民出版社、一九八五年)、原富男『補史記芸文志』(春秋社、一九八〇年)など。

(5) 梁玉繩『史記志疑』(清乾隆一七八七、中華書局、一九八一年)、瀧川前掲『史記會注考証』。ちなみに池田四郎次郎『史記補注』(明德出版社、一九七二年)は、字句の校訂や解釈が中心で、出典は以下の資料にとどまっている。

(史記補注) 左伝、戦国策、説苑、新序、淮南子

(6) 王国維「殷卜辞中所見先公先王考」(一九一七年)、「殷卜辞中所見先公先王統考」(同年、以上のち『觀堂集林』卷九)。また同「史記所謂古文説」(一九一六、『觀堂集林』卷七)、「史籀篇疏証序」(一九一六、『觀堂集林』卷五)にも『史記』に関連する考証がある。

(7) 陳直『史記新証』(天津人民出版社、一九七九年)、同『漢書新証』(一九五九、第二版、天津人民出版社、一九七九年)。

(8) たとえば李学勤「馬王堆帛書与《鶡冠子》」(一九八三、『李学勤集』黒龍江教育出版社、一九八九年)では、帛書を『漢書』芸文志の分類に従って説明している。

(9) 佐藤武敏「司馬談と歴史」(『司馬遷の研究』汲古書院、一九九七年)。

(10) 荊門市博物館『郭店楚墓竹簡』(文物出版社、一九九八年)。

(11) 『漢書』芸文志では、六芸略の書籍を「易、書、詩、礼、楽、春秋、論語、孝経、小学」に分けたが、「易、書、詩、礼、楽、春秋」は、戦国時代から經典とみなされていたらしい。郭店楚簡「六徳」に、「諸を詩・書に觀れば則ち亦た在り。諸を礼・楽に觀れば則ち亦た在り。諸を易・春秋に觀れば則ち亦た在り」とある。郭店楚簡「語叢一」には、「易は天道・人道を会する所以なり」「詩は古今の情(志)を会する所以なり」「春秋は古今の事を会する所以なり」という表現があり、これらは『易』『詩』

『春秋』の性質を述べたものである。

- (12) たとえば浅野裕一『黄老道の成立と展開』（創文社、一九九二年）を参照。
- (13) 定県漢墓竹簡整理小組「定県40号漢墓出土竹簡簡文」、同『《儒家者言》 釈文』（以上、『文物』一九八一年八期）、『定州漢墓竹簡《論語》』（文物出版社、一九九七年）。
- (14) 工藤元男『睡虎地秦簡よりみた秦代の国家と社会』第四章「睡虎地秦簡『日書』の基礎的検討」（創文社、一九九八年）。
- (15) 湖北省荊州市周梁玉橋遺址博物館編『閔沮秦漢墓簡牘』（中華書局、二〇〇一年）。
- (16) 湯淺邦弘『中国古代軍事思想史の研究』（研文出版、一九九九年）。
- (17) 馬王堆漢墓帛書整理小組編『馬王堆漢墓帛書（参）』（文物出版社、一九八三年）、吳榮曾「讀帛書本《春秋事語》」（『文物』一九八八年二期）。
- (18) 前掲『馬王堆漢墓帛書（参）』（一九八三年）、佐藤武敏監修『馬王堆帛書・戦国縦横家書』（朋友書店、一九九三年）、拙稿「馬王堆帛書『戦国縦横家書』の構成と性格」（前掲『史記戦国史料の研究』）など。
- (19) 拙稿「『史記』穰侯列伝に関する一考察」（『東洋学』七一輯、一九八六年）、同「『史記』韓世家の史料的考察」（前掲『史記戦国史料の研究』）。
- (20) 湯淺邦弘「蘇る戦国故事—資料紹介『馬王堆帛書戦国縦横家書』」（『中国図書』六一五、一九九四年）。
- (21) 紀年資料については、拙稿「『史記』戦国紀年の再検討」（前掲『史記戦国史料の研究』）、拙稿「『史記』項羽本紀と秦楚之際月表」（『東洋史研究』五四—一、一九九五年）など。
- (22) 「虎溪山1号漢墓後期発掘整理又稜成果」（『中国文物報』一九九九年一月一七日）。
- (23) 馬王堆漢墓帛書整理小組編『馬王堆漢墓帛書（肆）』（文物出版社、一九八五年）、山田慶児「扁鵲伝説」（『夜鳴く鳥』岩波書

店、一九九〇年)など。ちなみに太史令が所属する太常には、太卜、太医がおり、医術に関する情報を得る可能性がある。

(24) その概略は、前掲『史記戦国史料の研究』、拙著『司馬遷とその時代』(東京大学出版会、二〇〇一年)を参照。

(25) 佐藤武敏「司馬遷の旅行」(前掲『司馬遷の研究』)、拙稿「司馬遷の旅行と取材」(『愛媛大学法文学部論集』人文学科編八、

二〇〇〇年)、同「司馬遷的取材与秦国人物」(秦始皇兵马俑博物館編『第5回秦俑學術討論會論文集』陝西人民出版社、二〇

〇〇年)、前掲『司馬遷とその時代』など参照。